

舞台芸術の

未来

をのぞむ

連続講座

2023

～持続可能な
創造環境に向けて

報告書

第1回 老いと舞台表現

第2回 舞台芸術と遊び

第3回 ベイビーシアター

第4回 脳科学から見た演劇

第5回 アーカイブ～その創造性と未来志向

第6回 舞台芸術の公共性と公共圏

全6回

※各回終了後におしゃべり会を実施



舞台芸術制作者
オープンネットワーク

2020年の年明けから新型コロナウイルス感染症が蔓延していましたが、近年新規感染者は減少し、政府の対策ガイドラインが緩和されています。公演数・観客数も増え、失われたものを取り戻そうとするかのように慌ただしい日々が再開されています。そこには、ダメージを受けながら忙殺され傷んだままになってしまう、また、内向きで近視眼的になってしまう、そんな傾向が潜んでいるかもしれません。私たちは舞台芸術と社会に対して、コロナ禍やそれ以前の時と同じ向き合い方で良いのでしょうか。新たに先を見据えて何を目指し、どんなことが必要か。かねてよりそんな懸念が続いていました。

そこで今回は、従来のマイナスからの出発点をゼロに戻すような課題解決的な発想ではなく、長期的なプラスのイメージを持って大きな視点で舞台芸術と社会について見直したいと考えました。3年目となる連続講座を行うにあたり注目したのは、持続可能な創造環境を阻む外的要因ではなく、私たち自身の身体・心理など内なる創造環境そのものです。人間とは何か。創造の根源にあるものとは？ 舞台芸術と人間性のつながり、社会との関係は？ 例えば――

人生のスタートである赤ちゃんについて。誰もがそこから歳を重ね少しずつ老いていきます。生涯を通じて人は遊びを求め続けているのかもしれませんが。舞台芸術はそこにどんな関わりを持っているのでしょうか。

未知の領域ながらも解明が進む脳科学と演劇との親和性、過去を未来へとつなぐ創造的なアーカイブについて。さらに、舞台芸術における公共性と公共圏とは？

こうして2023年度の連続講座は「老いと舞台表現」「ベイビーシアター」「舞台芸術と遊び」「脳科学から見た演劇」「アーカイブ～その創造性と未来志向」「舞台芸術の公共性と公共圏」で構成しました。

総合タイトルについては過去2年間「契約にまつわる」「関係性をめぐる」と続いてきましたが、シリーズの最後となる今回は「未来をのぞむ」だと直感していました。そこには、前途を「はるかに見渡す」という意味だけでなく、自由でのびやかな将来性を「希求する」という思いがこめられています。

ひとりひとりが大切にされ、人間が人間らしく生きていける社会のために――舞台芸術の持続可能な創造環境に向けて、ゆっくりと足を踏み出してみませんか。

特定非営利活動法人舞台芸術制作者オープンネットワーク
古元道広

舞台芸術の「未来」をのぞむ連続講座2023～持続可能な創造環境に向けて

2021年の「契約」にまつわる連続講座、2022年の「関係性」をめぐる連続講座では、コロナ禍を契機として舞台芸術の創造環境における課題を可視化し、改善をはかる一助となりました。

2023年はシリーズの最終章として、私たち自身の身体・心理等の視点から、より長期的かつ前向きに人と舞台芸術のあり方を見つめ直します。

舞台芸術の特性と可能性を引き出し、新たな発想、思考および活動の起点や拠り所を探る、全6回のオンライン講座です。

第1回

老いと舞台表現

2023年10月23日 [月]
19:00-21:30

以前より日本では、高齢者が舞台に立つことは特別ではありませんでした。時にネガティブな印象を持たれていた「老い」が、人口の1/4が高齢者という社会で当たり前のことになっています。

思想や感情などを表すこと、また、それが形として表れる「表現」に年齢は関係なく、一生を通じたものであり、その人らしさ＝個性に強く結びついています。老いてからの自由にも焦点を当て、演劇と舞踊それぞれから社会と舞台芸術における「老い」をポジティブに、豊かなものとしてとらえてみます。

講師



菅原直樹

「老いと演劇」
OiBokkeShi 主宰

講師



中島那奈子

ダンス研究者
ダンスドラマトルク

一人目の講師・菅原直樹さんより、まずは高齢者と一緒につくる演劇、認知症ケアを考える演劇ワークショップをいくつも行ってきた経験から、「介護と演劇は相性がいい」「お年寄りほどいい俳優はいない」「介護者は俳優になったほうがいい」といった発言がありました。

認知症の方が健常者と異なる内的世界を生きている時、どう接するのが良いか。それを否定し別の価値観を押しつけると認知症の方は心を閉ざしたり感情的になってしまい、介護者も意固地になってしまう。これは一般的なコミュニケーションの大原則とも言えることであり、その逆であれば、心を開いてより良い関係性がうまれる。高齢者はだんだんできることが少なくなっていくが、共に舞台に参加する人との間に信頼関係が培われていくことで、むしろできることが増えていくことがある。高齢の方に気付かされることが多く、ポジティブな気持ちになる。といった様々な知見が共有されています。

二人目の講師・中島那奈子さんからはまず、「老い」を必ずしも高齢化ではなくエイジングという意味でとらえること、

動く身体を扱う舞踊では加齢によるその変化が大きな問題になることが語られました。

西洋のバレエ、ダンスにおける「老い」と、日本の舞踊家の「老い」とそれを支える作品形式や美意識。それをどうアップデートするか。歴史的建造物で行われた老いる身体と声の共鳴の取り組みなど、異なる年代や舞踊の型、役割、作品の作り方の違いを超えた、老いと踊りに関する様々なアプローチについて紹介されています。

さらに、カナダで先住民のダンスカンパニーにドラマトルクとして関わる中で、「生きるアーカイブとしてのお年寄り」がコミュニティでの踊りなどについて重要な役割を担い敬われており、その踊りが「私たちがどう生きるかを教えてくれる」という知の継承と文化の継続性を支えていることが話されました。

誰もが歳を重ね老いてゆく、決して「未来」から切り離すことのできない「老い」と舞台表現について社会的な視点からも見つめ、持続可能な創造環境を考えるいくつかのヒントが垣間見える講座となりました。

第2回

舞台芸術と遊び

2023年11月20日〔月〕

19:00-21:30

日本にまだ「芸術」という言葉のなかったころ、平安時代に使われていたのは「あそび」という言葉でした。その典型である「遊宴」は、日常とは別の世界で、他人と共に世界と自己とを体験するための仕掛けと考えられます。なぜ「遊び」は芸術から切り離されてしまったのでしょうか。そもそも「遊び」が持っている意義とは？ 世代や時代を超えて、創造の源ともいえる遊びと舞台芸術の関係を解き明かしていきます。

講師



尼ヶ崎彬

学習院女子大学名誉教授

スピーカー



額田大志

作曲家・演出家

メトミック、東京塩麴 主宰

尼ヶ崎彬さんによる、「無用な『遊び』はほんとうに無価値か?」「なぜ人は遊ぶのか?」といった問いから、「遊び」とは何かを考えていきます。まずカイヨワの『遊びと人間』を参照しながら、遊びを生み出す様々な「快への欲求」や他者との「一体化」とはどういう現象かを学びました。

次は日本の遊びと芸術についてです。まず美と実用をわけると、古代の「花実」論が紹介され、集まって詩歌管弦等の優雅な遊びをした後に酒宴を行う平安時代の貴族の「遊宴」と、庶民の芸能(田楽等)について説明がなされました。中世～近世には芸を「する」遊びから芸を「見る」見物へと変わり、「見せる」プロと「見る」観客の分離、「遊び」のエンタテインメント化が進みます。さらに近代、「芸術」制度が輸入され、実用でも遊びでもない「芸術」はそれ自体で価値がある高級文化であり、誰でもできる遊びである「遊芸」(趣味)と区別する意識が生まれたとしています。芸術と遊びの分断、差別化です。

その後はポップアートやポストモダニズムが芸術の「まじめさ」を自縄自縛として揶揄し、「遊び」の自由さを取り戻したことに触れつつ、「作家の『創造』、永遠不変の『作品』、

正しく理解すべき『内容』といった観念から自由になるとき、遊びとしての舞台芸術の新しい可能性が開かれるのではないか?」と問いかけられました。

最後に、制作過程が楽しい遊び、演者間または演者と客の相互性の遊びなど、現在の遊びと実演芸術の関係がいくつか例示され、他の可能性はないだろうか?と締め括られています。

額田大志さんの創作活動は、その一つと言えるでしょう。ご自身の作品を紹介しながら、上演＝「新しい遊び」をつくる、というお話がありました。形式をつくることや観客との共有など、いかに遊びの要素を組み込むかというクリエイティブな面を知ることができました。

尼ヶ崎さんの「遊びとは現実から一時離脱して自己や世界の可能性、この身体の拡張可能性、体験の限界の可能性を試みる」という言葉を胸に、改めて連続講座のテーマを考える機会となりました。

第3回

ベビーシアター

2023年12月18日〔月〕
19:00-21:30

赤ちゃんと共に大人が参加する体験型演劇。様々な事例について発達心理学、脳科学、保育・教育学等を切り口として概説しながら、社会的存在として赤ちゃんに向き合うことが、いかに大切であるかを学びます。

「自由」な赤ちゃんが無意識に全身で世界を感じ取り、感情や欲求を表すことは、至高のダンスあるいは演劇的な行為であるかのようです。その限りない好奇心や遊び心は創作及び鑑賞の出发点であり、舞台芸術との関連性についても理解を深めます。

講師



浅野泰昌

倉敷市立短期大学准教授
一般社団法人
日本ベビーシアターネットワーク理事

スピーカー



弓井茉那

BEBERICA theatre company 代表
演出・プロデューサー
一般社団法人
日本ベビーシアターネットワーク理事

浅野泰昌さんより、資料映像を観ながら「乳幼児たちが舞台芸術をいかによく観ているか」を知るところから始まりました。赤ちゃんとは改めてどのような存在なのか、大人との共通点と相違点等も探っていきます。

次に、生涯にわたる人間形成の基礎を培うのが乳幼児期であり、この大事な時期に保育や教育によって「人との関わりを円滑にする脳の働き全般」を指し示す「社会脳」の機能を保持・向上させることの重要性が語られました。一例として、ミラーニューロンによる情動的共感による他者理解等に触れられています。

さらに、舞台芸術は①人類が原初から享受する「根源的な芸術」、②時間的・空間的な変化を多感覚で感受する「総合的な芸術」、③構成要素が相互に関わり合う「関係性の芸術」であり、実際の作品映像を提示しつつベビーシアターが優れた舞台芸術たりうることが示されました。また乳幼児には、それを受容する力があること、それを正しく理解して発揮できるような環境づくりが極めて重要であることを学びました。

ベビーシアターは人々を繋ぐプラットフォームの中心になれるのではないかと——最後は日本におけるベビーシアターの社会的意義と今日的価値についてのお話でした。舞台芸術として本質的な価値を持ち、同時に社会包摂にも有効でありながら、予算の確保などそれを支えるための健全で持続的なあり方が課題となっていることが明らかにされています。

次は弓井茉那さんより、ベビーシアターをどう上演するかのお話です。上演時間、舞台空間、俳優と演技といった基本的なことから、観客と上演をつなぐ「観劇サポーター」の必要性など、大人も含めた観劇の最中とその前後も含めた環境づくりの説明がありました。

手間と労力がかかる、チケット収入が少ない、助成金の枠組にはまりにくい等の現状が語られつつも、「赤ちゃんは最高の共演者」であり「社会の中での最高の協働者」でもあり、人間そのもの、命の根源に触れるアートとしてのベビーシアターが世界を照らす、という言葉に希望が感じられます。

第4回

脳科学から見た演劇

2024年1月15日 [月]

19:00-21:30

他者を演じるとき、脳内では何が起きているのでしょうか。近年、脳科学が発達し、脳の働きが詳しくわかるようになってきました。再生される「感情」のアーカイブとしても興味深く、脳の機能を知ると、演技へのアプローチや表現が変わってくるかもしれません。ミラーニューロン、シーン構築、デフォルトモード・ネットワークなど脳科学の領域から演劇について掘り下げ、両者の親和性をたどりつつ、人間の創造性や革新性に迫ります。

講師



田中昌司

上智大学名誉教授

工学博士

日本声楽発声学会理事

スピーカー



横山義志

ドラマツルク

舞台芸術研究

田中昌司さんから冒頭に次のような講座の概説がありました。

<目的> 演劇に関わる脳の機能とメカニズムを脳のネットワーク論的視点から考える

<前半> 脳の中に俳優と批評家がいる

いわゆる「アクター・クリティック・モデル」と呼ばれる機械学習(AI)のスキームが、人間の脳に実際に存在することが実験的に検証されている。この脳内システムの演劇における主要な働きや、認知・運動・感情制御のスキルおよび報酬系との関連などを、最近の実験結果を紹介しながら解説する。

<後半> 脳の内側面とイマジネーション

脳のネットワーク論的な理解の仕方を紹介し、その視点からミラーニューロン活動、および演劇において重要なイマジネーションや創造性を持つエピソード記憶の働きなどについて論じる。内向き意識の脳科学的な意味についても考察する。

—— AIという、行動によって報酬と罰が与えられる「強化学習」で賢くなる仕組みは脳の働きに見られ、ドーパミンの適切

な分泌が正常な情報伝達を促すことが説明され、モチベーションに影響を与えていること、演劇や音楽の熟練のためこの仕組みが重要であることが語られています。意識的な活動をしていない時に働く脳のデフォルトモード・ネットワークが、イマジネーション・創造性に重要な働きをすることなど、多岐に渡り学びました。

横山義志さんからは、歌や踊りの能力を「ヒト性」とし、映像よりライブの方が反応しやすいミラーニューロンと身体の強い関係、さらにヒトは群れで生きることについてのお話がありました。「公共性」を言葉に依拠せず、「ヒトという生き物の性質から「演劇」の公共性を問い直す」というテーマで、脳科学に加え生物学、人類学からもアプローチがなされています。

近年、従来以上に人間の脳の機能およびネットワークが解明され、著しく発達している人工知能との相互研究も進められています。演劇の際立った性質が脳の働きと強く結びついていることを意識しながら、先駆的で類のないお話から人間の深層にある創造的な環境へと目を向けることとなりました。

第5回

アーカイブ ～その創造性と未来志向

2024年2月13日 [火]
19:00-21:30

圧倒的なエネルギーを持ちながらその時かぎり
で消えてゆくライブパフォーマンスと、その
膨大な情報を製作段階を含め最大限固定化
し活用することのできるアーカイブ。それぞ
れの特質を踏まえながら、新たに生み出され
る価値、発展的な関係について考えます。
記憶が呼び覚まされ、感情が呼び起こされ
るプロセスにおいて、これまでにない創造性
や発信性が見出されることでしょう。演劇
的な虚構性をはらんでいることにも着目し
ます。

講師



吉見俊哉

國學院大学教授
東京大学名誉教授

スピーカー



松延耕資

作曲家
演奏家(紙カンパニーproject)

吉見俊哉さんより『死者たちが演じる—アーカイブとしての
劇場—』として、次のようなお話がありました。

<演劇を成り立たせる2つの時間軸>

1) 水平的な時間軸：広い意味での演劇は至るところにあ
り、祭り／事件の左右に「期待する地平」と「想起する地平」
がある。

2) 垂直的な時間軸：未来／過去を往還する2つの非日常
の時間(軸)がある。自分が影響を受けた如月小春と遠藤
琢郎は死者との対話について作品を発表している。

<時間軸に位置づく空間軸>

東京大学での最終講義を、空っぽにした安田講堂でオン
ラインで実施。その空間が持っている記憶をどう甦らせる
か。舞台には客席と他界、あるいは異化と死者の間とい
う関係があり、演劇はそれを越境する技法といえる。「三
度征服された都市」東京には無数の過去や死者たちの影、
失われた者たちの記憶の痕跡がある。演劇とは失われた
者たちを現世界に甦らせていく記憶術、一種のアーカイブ
的な実践ではないか。

<デジタルアーカイブ(化)の重要なポイントより>

文字だけでなく映像・音声で記憶され、膨大なメディア文
化資産がうまれる。結果の保存からプロセス全体の保存へ。
演劇ではその外側にある都市や劇場等との関係が問題に
なってくる。より本質的に演劇とは何かということを考える
べきではないか。過去あるいは死者との対話としての演劇
／アーカイブという大きな意味を持つてくる。

次は松延耕資さんのお話です。まずは「芸術の再現不可
可能性を経験する枠組み」として演劇公演を「捏造」し、アー
カイブそれ自体を表現手段として再発見することを目的とし
ている<紙カンパニー project>の紹介。続けて宣伝美術、
写真、美術、音楽、批評等について説明があり、創作の
表裏が明かされました。

ここでのお話を受けて二人の対談では、記録や記憶を保
存し再生する実践的な行為全体がアーカイビングであり、
そこに解釈、変容、捏造が入り込むことが演劇と通じている、
等のお話が繰り返し広げられています。

第6回

舞台芸術の 公共性と公共圏

2024年3月12日 [火]
19:00-21:30

演劇そして舞台芸術が持ち得ている公共性は、その力を発揮していると言えるでしょうか。私的／公的な領域の変化と「公共」に関する主要な言説に触れながら、「公」「官」だけでなく「私」「民」が持つ力の重要性について確認し、必要と思われる「公共」のありようを再認識します。

これまでの連続講座での「権利編」（表現の自由など）、「文化権と法律編」に続き、舞台芸術の本質と社会的な意義を追求します。

講師



内野儀

学習院女子大学教授

スピーカー



萩原雄太

演出家

かもめマシーン 主宰

内野儀さんより齋藤純一氏の「official」「common」「open」という公共性の定義が引用され、日本では1990年代～2010年代に公共劇場の開場、芸術監督の交代やいわゆる劇場法の制定が続いたことが語られます。さらに、クリストファー・バルミ『演劇の公共圏』（藤岡阿由未訳）の原著から、解説を含め次のようなお話がありました。

ハーバーマスの「公共圏」では、参加・言論の自由、参加者の自律性と平等性等が民主主義の中心的前提を作り、演劇は歴史的にそうした（公共的コミュニケーションが生み出される／演じられる）場所であった。しかし、もともと演劇に備わっていた社会的・政治的な役割の効力と重要性は失われ、劇場は親密で私的な空間になり、実質的な公共圏は機能を停止する。その後、SNSの民主主義的効力が認知され、劇場以外の場所を使ったり劇場そのものを議論の場所にする動きがあった。『あいちトリエンナーレ2019』のような状況が劇場や演劇で起きるとき、そこに生じるのがバルミの考える公共圏、演劇の公共性といえる。

今の日本語圏では、名前を冠していない、固定化していない集まり（方）はどうか。自由に集まり対話し、適宜離合集散する。継続的な場としてのプラットフォームやスペースも。異なる世代やイデオロギーなどの「まだら」な公共圏。バルミの「公共圏は私たちの未来やそのイメージの概念化に不可欠」という言説から、そのために演劇／劇場がどう機能するかを考えていく。

萩原雄太さんからは、舞台芸術は公共的なのか、演劇をつくる＝「私的」な営みだったのでは、という問いかけがあり、個人の体と公共について、私的領域と公的領域がせめぎ合う「場」として身体をとらえ直してきたことが語られます。さらに、別の公共圏にある身体とどのように他の公共圏とが混ざり合うか、身体表現を通じて生まれる新たな公共圏～公共性とは、といったお話がありました。

その後の対談では、舞台芸術活動が公的助成に影響を受けることや、芸術や教育に関する「私」「公」とその身体（観客を含む）などについても語られ、考えを深めています。

アンケートより

第1回 | 老いと舞台表現

この講座をどちらでお知りになりましたか。

- Facebook
- X (旧Twitter)
- ON-PAMのホームページ
- ON-PAMのチラシが職場で回覧されていたため
- Peatixのお勧め

どうして受講しようと思われましたか。

- 事業に興味があったものの、所属が管理グループとなったため、少しでも舞台芸術に触れられる機会を作りたいと考えたため。
- 字幕がついた講座なので。
- 菅原さんのWSに何度か参加しており改めて話を聞きたいと思った。
- OiBokkeShiさんの『レクリエーション葬』を観劇して、気になった。
- 演奏会の企画構成の仕事もしており、今後の参考にしたかったため。
- 菅原さんの話が聞きたかったから。
- 大学で演劇学を学んでいるため。

「老い」について感じることや、イメージを教えてください。

- 身体能力の衰え、人生の黄昏の時間、ゆっくり時が流れる。
- できなくなることが増える。
- 多すぎてあまり書けないが、漫画作品などのかっこいいおじいちゃんおばあちゃんのイメージもある。
- さまざまなライフスタイルを持つ世代。
- 来世に行ける。
- 周りの方が老いていくことに対しては肯定的と考えられるが自分が老いていくのは怖い。

「老いと舞台表現」について考えられることがありましたら、教えてください。

- 認知症などではなく、ただ身体が衰えていくことや癌のような病気の時に演劇は何ができるか、中島さんのお話でもありましたがそれぞれがその身体で輝ける場を作るにはどうしたらいいのか考えていかないといけないと思った。
- 老人性難聴などの観客へのサポートの有無。
- 演劇とは台詞を憶えることとと思っている人が多く、それが記憶力が衰えていく高齢者が演劇をする障害になっている、としたら、もったいない。
- 老いているからこそそのリアリティが強く印象に残る。
- 世界の飛び越えができるのが舞台芸術の凄いいところだと思いました。
- 高齢者の割合が増える日本において、パフォーマーとしても、オーディエンスとしても、積極的に向き合う必要がある。
- 介護と聞くと「しんどい」イメージがありますが、少しでも楽しくなるように、舞台上に限らず介護する側が演じることで、日常生活を舞台にしてみれば、辛さが少しでも和らげられるのではないかと思います。

本日の感想やご意見、舞台芸術の未来や持続可能な創造環境についてなど、ご自由にお書き下さい。

- まだうまく全てを咀嚼できていませんが、とても未来が明るく感じられました。
- 持続可能な創造環境がほしい、死んでも演劇がしたい。
- 舞台表現を通じて他人が見ている世界を見ることで理解や思いやりにつながったり、ポジティブなものになることは非常に素敵だと思います。高齢者は鑑賞する受け身な形で芸術文化に関わることが多いと思うので、何歳になっても輝き、老いを活かす機会を提供したいと思いました。

○おかじいは菅原さんに会ったことで出来たことがたくさんあるのかもしれないが、ウチの両親やそういうアクティブじゃない人をどんなふうと一緒に幸せになれる方法があるだろうと、演劇じゃなくてもいいのだけど、演劇だったら何ができるだろうと、お話を聞いて考えています。

○舞台芸術は「引き立て役」がないという言葉聞き、多文化共生の未来を創るうえで重要なエンタメであると思いました。

○人間のリアリティを表現するパーツとして老いた俳優の存在が貴重になると思います。

まわりで起きている問題点、聞いてみたいテーマなどありましたら、ご記入ください。

○字幕付き演劇の設備費、翻訳機の翻訳者に払われる平均的な給与等。

○死生観形成への舞台芸術の効果。

○稽古場を借りる費用が重い。皆多忙で稽古でもなかなかメンツが揃わない。劇場は使いづらいので、そうじゃない場所で公演がしたい。いっそ自分たちの稽古場兼劇場を持ってご近所にも開放して、作って、みせて、の日々を送りたい。

○見えない人と聞こえない人、両極にある人も舞台を共に楽しむために、共通する支援は何があるのか知りたいです。

ご自身の年代をお聞かせください。

- 20代
- 40代
- 50代
- 60代

職業・肩書・所属(学校名)等を教えてください。または、どんな芸術文化(分野)との関わりをお持ちですか?書ける範囲でできるだけ具体的をお願いします。

- 公務員 アートフラワー舞台装飾 楽屋見舞い作成
- 演劇ワークショップファシリテーター
- 作曲・編曲家 コンサートの構成作家
- 大学生
- 大学生 学生演劇 ミュージカル 字幕付き英語劇
- 演劇祭の実行委員を10数年やっている
- 文化振興財団・公立文化ホール所属

活動年数または在職年数を教えてください。

- 10年弱
- 新卒1年目で在職半年です
- 28年 デザイン3年
- 約30年

第2回 | 舞台芸術と遊び

この講座をどちらでお知りになりましたか。

- Facebook X (旧Twitter) ON-PAMのホームページ
ON-PAMからのEメール ON-PAMのチラシ

どうして受講しようと思われましたか。

- 舞台芸術に関する知識を身につけるため。
過去2年受講して、今回も内容がいいから。
タイトルに惹かれて。
内容に興味があるので。
まさに「持続可能な創造環境に向けて」について、学びたいと思っていたので。
講座の内容が示唆に富んでいた為 いい意味で実用性から距離をとった内容もあり、それがよかった。
連続講座のテーマに興味があった。
自分のプロジェクトと関連したテーマなため。

どんな遊びを(どんな人と)していますか? その年齢による変化や、いま興味のあるものを教えてください。

- 2歳の息子と仕草のマネをし合ったり、音楽や音と共に踊ったり(その場限りのめっちゃくちゃなもの)、体を動かしたりすることをよくします。年齢を重ねると遊びにお金がかかるのはなぜなんだろうと思ったりします。
赤ちゃんとの遊びに興味があります。
65才になっているのですが、演劇を遊んで来たという感じです。
文章を書くなかで遊びたいと思います。
数年前、街歩き謎ときゲームをしたことがあります。その種の専門会社が企画したもので、難しかったんですけど、面白かったです。
幼少期はごっこ遊びをしていましたが、今は友達と一緒にいることが遊びとなっています。
「遊び」をどう捉えるかと言う事を学んだ上で考えると、年齢を経るにつれて、遊びの質が変化すると思った。
新しい手遊び、体遊び、物遊びを作るプロジェクト。

あなたにとって「遊び」とは? ご自身やまわりの創作・鑑賞等の芸術活動と、遊びの関係についてお書き下さい。

- 自分は不意に思った言葉を即興で曲にしてしまうことがよくあります。本日の講座を聞き、それも遊びだったのかと思いました。
「遊び」的な要素は創作の一つのきっかけ/ヒントになるが、それをエンターテインメントやアートに出来るかどうかは、結局は創作者の経験値や技術に如何なのかと思う。
福祉において、文化芸術を「余暇」や「趣味」扱っていますが、福祉と「遊び」というのもあり得ると思いました。
金銭・ビジネスを伴わない人たちと時間の共有をすること。
何においても「遊び」がほしい、観客としては、創作者の遊び心を味わっています。
楽しいもの、共有したくなるもの、多くの人にとってアクセス可能なもの。
外国につながるこどもの居場所づくりを始めようとしています。その中で母語教育を行う際に、お勉強では子ども達は学びたがらない/必要性を感じない、遊びのなかで学ぶカリキュラムにしようと、母語教育に長年関わってこられている専門家の方の話を聞きました。特に親だと有用性を求めがちです。私もそうです。専門家の指摘について、本質をついていると思いました。

本日の感想やご意見、舞台芸術の未来や持続可能な創造環境についてなど、ご自由にお書き下さい。

- 「遊び」と「文化芸術」をリンクさせた講座は初めてで、今回のテーマとしてこの切り口を考えた人はさすがだと思います。尼ヶ崎先生の系統だったお話も良かったですし、額田さんが企画された「ふるまい部」というネーミングにも感心しました。興味深いお話を聞かせていただきました。
「舞台芸術」と「遊び」の結びつきを、持続可能な創造環境にどのように役立てるのか……今ひとつ、見えてきませんでした。
業界の未来や持続可能な創造環境について、改善や更新していく視点で活動をしていくことはとても大事だと思います。しかし、地域で見える暮らしから、それ以前に文化や芸術の専門家が働くべきことがあるだろうと思うことがあります。私は今はそちらを頑張りたい。
面白かったです。遊びについて遊び半分ではなく真剣に取り組む、遊びを遊びたいなあ、大学に入って演劇の研究をしたくなりました。
非常に興味深く、学びが多かったです。企画していただきありがとうございます。

まわりで起きている問題点、聞いてみたいテーマなどありましたら、ご記入ください。

- 第一線で活躍されていらっしゃる多忙な方(特に女性)のプライベート(結婚・妊娠・育児・介護・自身の健康など)との両立方法。
学びの内容を実践につなげられない若いアーティストが多い様だと思います。
指定管理者制度による公立の文化会館を民間が管理するメリットとデメリットについて。
フリーランスアーティストの経済的な問題や事務仕事の多さ。
アゴラが閉館するそうですね、昔、本多劇場ができた頃、これからはあちこちの町に小さな劇場ができて、映画を観るように演劇も観られるんだ、とワクワクしたものでした。まさか、劇場も映画館もなく、本屋も喫茶店もなくなり、高いお金を出さないと遊べない町ばかりになるなんて。どうしたら、いいのでしょうか。小さなアートをスペースを作りたい、死ぬ前に。
指定管理者制度は悪か、必要悪か、善か。直営がいいのか、指定管理者制度がいいのか。

ご自身の年代をお聞かせください。

- 20代 30代 40代 50代 60代

職業・肩書・所属(学校名)等を教えてください。または、どんな芸術文化(分野)との関わりをお持ちですか?書ける範囲でできるだけ具体的をお願いします。

- 劇場 舞台芸術 在住外国人の文化権・外国につながる子どもの文化的な教育 劇場勤務 無職 地域のアマチュア演劇祭の実行委員 劇作家 舞台照明 文化振興財団所属 音楽集団の理事 作曲・編曲家 振付家・遊び開発 ダンス・ジャグリング・サーカス

活動年数または在職年数を教えてください。

- 8か月 6年程度 10年 24年 29年 演劇をはじめたのは40年前 縁遠くなって15年くらい前から演劇祭実行委員

第3回 | ベイビーシアター

この講座をどちらでお知りになりましたか。

Facebook ON-PAMのチラシ

どうして受講しようと思われましたか。

触れたことのない芸術文化の知識を得るため。
過去2年受講しており、今年度も内容が優れているから。

ベイビーシアターのイメージを教えてください。

以前弓井さんのプレゼンを配信で視聴したことがあり、ベイビーシアター=BEBERICAの公演風景です。

ベイビーシアターとご自身の活動等について、どのようなつながりがありましたか。

ベイビーシアターという演劇を初めて知りました。
今、個人的に文化芸術と福祉の連携・協働に関心があり、参考になりました。

本日の感想やご意見、舞台芸術の未来や持続可能な創造環境についてなど、ご自由にお書き下さい。

毎回延長し、最後のおしゃべり会まで参加することが難しいので、質疑応答や補足説明のみでいいので議事録のようなものをあとで共有していただくとありがたいです。
乳幼児に係る文化芸術論をきちんと聞いたのは初めてで、浅野先生のお話はとても良かったです。パワポ資料が欲しかったのですが、配布されない意向でしようから、説明で使われたユーチューブのリンク先だけでも、今後の配信時にメールいただけると嬉しいです。弓井さんの、資金面のお話は、大きな課題だと思いました、質疑の時間がなくて聞けなかったのが、どんな質疑があったのか、後日何らかの場で教えて欲しいです。

まわりで起きている問題点、聞いてみたいテーマなどありましたら、ご記入ください。

文化施設における、ネーミングライツ、広告、協賛金等の企業からの収入確保策。

ご自身の年代をお聞かせください。

20代 60代

職業・肩書・所属(学校名)等を教えてください。または、どんな芸術文化(分野)との関わりをお持ちですか?書ける範囲でできるだけ具体的をお願いします。

文化振興財団に所属しています

活動年数または在職年数を教えてください。

1年未満

第4回 | 脳科学から見た演劇

この講座をどちらでお知りになりましたか。

Facebook X (旧Twitter) ON-PAMのホームページ
登壇者からの紹介

どうして受講しようと思われましたか。

脳と演劇の係わりに興味があったので。
舞台をどうバリアフリーにできるか。
脳科学は今とてもホットな分野だと思います。脳というブラックボックス的な未知の存在に強い興味と好奇心と可能性を抱いています。
脳(心理学、精神医学)と芸術に興味があったから。
連続講座で申し込みをしたから。
過去2年も受講していて、今回も内容がいいから。
横山氏の話聞いてみようと思って。

受講後、改めてご自身の日常生活や舞台芸術活動を思い返した時、「脳科学」と関係のありそうな事柄や体験などがあればお書きください。(ちょっとしたことで構いません)

本番が終わってしばらくたってから、入浴中などに「あれって、そういうコト?」とか「こういうやり方もあった」とか急に思いつくのはデフォルト・モード・ネットワークだと思った。
映像を見て涙するのはそういった働きなのだとわかった。
エンターテインメントを超えた芸術的と思える舞台作品に出会ったとき、場を共有した観客として、自身の経験などが舞台の中のフィクションとシンクロして、消化されて、トラウマ的な付随物が消えて、あるべきフォルダにすんと収まるような感じを受けることがあります。演劇の持つ浄化的な側面かなと思っています。それもミラーニューロン等による共感能力とか、コミュニケーションによってムラを築くことで生き抜いてきたホモサピエンスならではの脳の働きに関係しているのだろうなと考えます。
20歳の国の『長い正月』をたいへん面白く観たところです。タバコも黒豆もお盆も全てパントマイムで、一人何役か演じ、100年の時を描くのです。脳内は想像力が大活躍、そして得られる快感、これが演劇の醍醐味。やめられません、くせになります。演劇は「病気」という人もいます。私には妄想の種で生きる糧。
自分があまり自覚のないシーンやセリフで感動したと言われるのは、何かその方のエピソード記憶を刺激したのかなと思いました。

身体や精神において、■未知の部分や不思議に思うこと ■成長・発達の可能性が感じられるところ を教えてください。それは舞台芸術とどんな関係がありそうでしょうか。

動きと気持の関係が不思議。動きの方に本心が現れているような気がしているところ。
老いに興味があります。老化は自然の法則ではないとか、止めることができるだとか、この先数年の研究が楽しみです。
今65才、だんだん刺激の強いものを遠ざけるようになって、あまり手のかかっていないドキュメンタリーに近いものを好んでみるようになってきました。経済的な事情もありますが、想像を働かせる機能が発達したとも。
舞台芸術の世界は、認知の偏りのある方と、視野が広くものすごくラショナルな方が共存している印象である。そういったコミュニティの構築の仕方、共存の仕方は現実世界に適用できるとすれば、可能性が感じられると思う。反面、理解されずボロボロになって去って行く制作者は、まさにカサンドラ症候群のようだと思う。そういった観

点から舞台芸術業界をしてみるの是非常に興味深いと思う。(が、企画化すると、いかんせんとてもデリケートなものになるな...と思いました。答えになっておらずすみません。)

本日の感想やご意見、舞台芸術の未来や持続可能な創造環境についてなど、ご自由にお書き下さい。

- 脳波で演劇を科学する実験に是非立ち会ってみたいです!
- アーカイブ視聴させていただきました。脳科学と芸術という切り口はこれまで触れたことがなく、内容もとてもわかりやすく、「脳の中に俳優と批評家がいる」という表現が印象的でした。ドーパミンはアルツハイマー型認知症のところによく耳にしますが、今回のお話が、芸術による認知症予防にもつながっていくといいと思いました。
- ワークショップからの創作では、セリフより距離感とか身体の動きとか身体性から創られていくことが多いのでヒト性に寄った演劇なのかなと思った。
- 演劇の魅力を脳科学から探索するのは面白いと思います。youtubeの「ゆる言語学ラジオ」を俳優の松田弘子さんのツイートで知り、フォローしていますが、世の中には知的好奇心を楽しめる人々がこんなにもたくさんいるのだと思うと未来も捨てたものではないと思えます、演劇にもお金にならない、お金のかからない、人間が本来持っていた豊かさ、があると思うので、いろんな角度から、脳科学からも、解き明かすことを楽しみ広められたらいいな。
- 講義はとても面白かった。田中先生、横山さんのお話、ともに学ぶことが多い、他者とのコミュニケーションを考えるに当たって、将来為になりそうだった。
- 個人的に脳科学と倫理について。田中先生には答えづらい質問を投げかけてしまったかと思うが、脳と芸術の関係性を扱うに当たって、倫理的に守るべきこと、踏み越えてはいけないラインはあるか、知りたく思った。(もし稽古で出る「変な物質」がドーパミンだとして、ドーパミンを抑制したら芸術への意欲も下がってしまう、など、何か根本的に矛盾を抱えたものがあれば、やはり前提として知りたい気持ちもある。が、それを誤解がないように伝えることや、個人の意見を守りながら伝えることは確かに大変なことだと思う。何か解決策や守るべきラインがあれば共有しながら考えたいが、そもそもそれを知りたいと思うことはルール違反なのだろうか...脳科学を極めないといけないのだろうか...)
- 貴重なお話ありがとうございました。

まわりで起きている問題点、聞いてみたいテーマなどありましたら、ご記入ください。

- AIで良い戯曲が書けるか...
- 相変わらず劇場は貧乏人には使いにくい。非劇場演劇(応用演劇というのですか?)について、教えてほしいです。
- 資本主義社会とAIの進化によって便利になって多様化していく社会では、コミュニケーションの必要性は薄くなっていくだろうなと思っています。演劇とか身体表現はだんだん旧来のものとみなされていくかもしれない、魅力をどんな風に訴えていけばよいのかな、そもそも時代に逆行するものだったりしないのかなと思ったりします。
- 制作者はカサンドラ症候群を患いやすいかどうか(すみません、思いついただけです。)

ご自身の年代をお聞かせください。

- 30代 ○40代 ○50代 ○60代

職業・肩書・所属(学校名)等を教えて下さい。または、どんな芸術文化(分野)との関わりをお持ちですか?書ける範囲でできるだけ具体的をお願いします。

- 舞台俳優 ○俳優 ワークショップデザイナー ○制作者・プロデューサー 演劇・舞踊・音楽・美術(19世紀~21世紀) ○無職 自称劇作家 アマチュア照明家 演劇祭(アマチュア演劇祭)実行委員 ○役者

活動年数または在職年数を教えて下さい。

- 8年目 ○演劇祭実行委員は16年 演劇活動はぼんやりと40年

第5回 | アーカイブ ～その創造性と未来志向

この講座をどちらでお知りになりましたか。

Facebook X (旧Twitter)

どうして受講しようと思われましたか。

どんな話をお聞きできるのか想像できなくて興味をもった。オンラインのお気軽お手軽も。

連続で受講しているから。

ご自身の活動などについて、どんなもの・どんなことをアーカイブしていますか。どのような方法かも教えてください。

ワークショップの実施内容。ノートに手書きで。

劇団ホームページを作り、脚本と映像の記録を残そうとしている。が、...

上記のアーカイブやそれ以外の様々なアーカイブを、どのように活用していますか。また、他に考えられる活用方法や、してみたいことがありましたら教えてください。

記録映像は思い出にしかならないかもしれない。脚本は違う演出で再利用できる(だけの力があるものを書きたい)戯曲を読む会はやってみたい。

別のワークショップの時の参考資料として使用。

本日の感想やご意見、舞台芸術の未来や持続可能な創造環境についてなど、ご自由にお書き下さい。

一昨日AICTの「思考の種まき講座」シリーズ講座(観客を創る)で佐野晶子氏のお話をお聞きした。その時もぼんやり感じていた、究極「演劇は観客の(心の)中に創るものかもしれない」という思いが今日のお話を聞いて強まった。私自身、自分の「よい観客度数」はけっこう高いと思っている。もはや往來の風景を眺めているだけで楽しめる。が、ここまでくるとは、いろいろな演劇に接してきたそれはそれは豊かな経験ができた。一日三食食べるように、ひと月に一演劇、という世の中になれば、みんな私のように能天気になれるのに。

まわりで起きている問題点、聞いてみたいテーマなどありましたら、ご記入ください。

演劇は作るにも観るにも「お金」がかかりますが、「お金」と無縁になる良い方法はないのでしょうか？

ご自身の年代をお聞かせください。

40代 60代

職業・肩書・所属(学校名)等を教えてください。または、どんな芸術文化(分野)との関わりをお持ちですか？書ける範囲でできるだけ具体的をお願いします。

無職 劇団主宰 演劇祭実行委員(地域のアマチュア演劇祭のボランティア) 各種協会会員 フリー 演劇系のワークショップデザイナー

活動年数または在職年数を教えてください。

10年くらい 劇団は10年目!?

第6回 | 舞台芸術の公共性と公共圏

この講座をどちらでお知りになりましたか。

Facebook ON-PAMのホームページ

ON-PAMからのEメール

どうして受講しようと思われましたか。

過去2年受講して良かったから。今回の内容も。

公共性と公共圏の違いについて、勉強したかったから。内野儀先生の話を受けたかったから。

今後の自身の活動に生かすべく、「舞台芸術の未来」について考察したかったから。

(舞台芸術の)公共性・公共圏についてどんな認識やイメージをお持ちでしたか。また、受講してからの新たな印象なども教えてください。

観客の匿名性、ということについて考えました。公共性を構成・担保する要素のひとつに、OPENであることがあるとすれば、匿名性を拒否できない。何故ならすべて見知った人になってしまうと、それは公共圏というよりコミュニティ(共同体)になってしまうから。といって、匿名性の弊害は昨今のSNSなどの惨状を見るに明らかです。鍵になるのはやはり、身体性と、空間を如何にして共有するか？にあるのではないかと考えました。

今年までの3年間で、今回だけがよく理解できませんでした。演劇の公共性について、関係者が共有していると思われる前提があつての講義だと思いましたが、その入口部分の解説がないので、最後までよく理解できませんでした。

未来に向けて、「公共性」の考え方がどう変わっていくのか...これ考える事も重要だと気づいた。

ご自身やそれ以外の過去・現在または今後の活動等について、公共性や公共圏とのつながりが感じられるものを教えてください。※できれば理由も

このテーマについて、特に問題認識もなかったし、これまでどのような議論がなされてきているのかも知らないです。

公共ホールとの共催でキッズコンサート/声優による朗読劇、などの制作を行います。

海外で、滞在制作を何回か手掛けています。特にそれが現地アーティストとの共同制作となると、発表時、普遍性を目指すのか、それともローカライズして例えばジャカルタの政情、バンコクの治安状況などを念頭に置かざるを得ません。何にしても目の前に顔の見える”他者”がいるからです。日本だけで活動していると、その他者と自己との”違い”に鈍感になりがちなのが、とって正典としてヨーロッパの演劇を参照するのも違う気がして、今、アジア圏(特に東南アジア圏)での演劇の公共性、公共圏ということについて思索・実践しています。

本日の感想やご意見、舞台芸術の未来や持続可能な創造環境についてなど、ご自由にお書き下さい。

公共性を論ずる際に、国と芸術人との対立という図式から説明される事があるが、今は官公庁/公共ホール/企業なども協力的。また受益者(=お客さまであり、助成金などの税負担をして下さる方)側からの視点が、ほとんど説明されていなかったのが残念。

非常に刺激的でした。今回の講座のシリーズの他の回も、アーカイブが視聴したくなりました。足元から一度、きちんと考えたいです。

まわりで起きている問題点、聞いてみたいテーマなどありましたら、ご記入ください。

○ai技術の進化と舞台芸術の制作の課題／これからの時代の、新人の舞台人・作家の教育のあり方／国際化と産学共同事業などの未来、など。

○“行き過ぎた”ハラスメントの告発(それも匿名の者や、売らんかなの似非ジャーナリズムによるもの)、あるいはそれに関する自己検閲、コンプライアンスの問題と、日本における公共性や公共圏の構築可否の問題とには、通底する課題があるように思っています。あえてここで、今の過剰な流れに反する、警鐘を鳴らすような言説も聞いてみたいです。

ご自身の年代をお聞かせください。

○40代 ○80代以上

職業・肩書・所属(学校名)等を教えて下さい。または、どんな芸術文化(分野)との関わりをお持ちですか?書ける範囲でできるだけ具体的をお願いします。

○作曲・編曲家、コンサートの企画構成、など

○劇団代表・演出家

活動年数または在職年数を教えて下さい。

○22年間 ○30年

アンケートには受講された方に感想をお書き頂くだけでなく、講座やおしゃべり会を踏まえて改めて自分やまわりの状況に目を向ける、一つの手立てとなりそうな質問を設けました。同じ内容の回答はひとつにまとめ、受講していない方にも読まれることを考慮し、個人に関する情報を含め一部を編集させて頂いています。

お寄せ頂いた様々な思いを通して、新たな気づきや発想などをわかち合いながら、ご自身にフィードバックして頂く機会にもなればと思っております。

ご協力頂きまして、誠にありがとうございました。

登壇者プロフィール

記載の情報は当時のものです。

菅原直樹 [「老いと演劇」 OiBokkeShi 主宰]

1983年栃木県宇都宮生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒。劇作家、演出家、俳優、介護福祉士。「老いと演劇」 OiBokkeShi 主宰。四国学院大学非常勤講師、美作大学短期大学部非常勤講師。青年団に俳優として所属。

2010年より特別養護老人ホームの介護職員として勤務。2012年、東日本大震災を機に岡山県に移住。2014年「老いと演劇」 OiBokkeShi を岡山県和気町にて設立し、演劇活動を再開。並行して、認知症ケアに演劇的手法を活用した「老いと演劇のワークショップ」を全国各地で展開。2016年より活動拠点を岡山県奈義町に移す。

平成30年度(第69回)芸術選奨文部科学大臣賞新人賞(芸術振興部門)受賞。

中島那奈子 [ダンス研究者/ダンスドラマトゥルク]

老いと踊りという研究分野を切り拓き、ダンスドラマトゥルクとして国内外で活躍。近年は老いやジェンダー、伝統と現代といった研究と実践を融合させ、米国ポストモダンダンスの再構成「イヴォンヌ・レイナーを巡るパフォーマティヴ・エキシビジョン」、日本のコンテンポラリーダンスのアーカイブ化「ダンスアーカイブボックス」、老いのダンス化「型の向こうへ」がある。2019/20年ベルリン自由大学ヴァレスカ・ゲルト記念招聘教授。2021年からカナダバンフセンターのドラマトゥルクも務める。著書「老いと踊り」。2024年3月に京都でドラマトゥルク・ミーティングを開催。(http://www.dancedramaturgy.org)

尼ヶ崎彬 [学習院女子大学名誉教授]

1947年生まれ。学習院女子大学名誉教授。専門は日本の美学、舞踊美学。著書に『花鳥の使——歌の道の詩学』(勁草書房 1983)、『日本のレトリック』(筑摩書房 1988)、『ことばと身体』(勁草書房 1990)、『緑の美学——歌の道の詩学II』(勁草書房 1995)、『ダンス・クリティーク』(勁草書房 2004)、『近代詩の誕生——軍歌と恋歌』(大修館書店 2011)、『いきと風流——日本人の生き方と生活の美学』(大修館 2017)、『利休の黒——美の思想史』(花鳥社 2022)、編書に『芸術としての身体——舞踊美学の前線』(勁草書房 1988)、『メディアの現在』(ベリかん社 1991)など。個人サイトに『Flying Cabinet 尼ヶ崎彬の書類箱』(http://amagasaki.no.coocan.jp/)がある。

額田大志 [作曲家・演出家/ヌトミック、東京塩麴 主宰]

作曲家、演出家。1992年東京都出身。東京藝術大学在学中にコンテンポラリーポップバンド「東京塩麴」結成。FUJI ROCK FESTIVAL の出演など、現在までリーダーとして精力的に活動。また2016年に演劇カンパニー「ヌトミック」を結成。「上演とは何か」という問いをベースに、音楽のバックグラウンドを用いた脚本と演出で、パフォーミングアーツの枠組みを拡張していく作品を発表している。2022年『ぼんやりブルース』で第66回岸田國土戯曲賞にノミネート。舞台音楽家としても数多くの作品に関わり、Q/市原佐都子、岩淵貞太、コンプソングズなどに参加。

浅野泰昌〔倉敷市立短期大学准教授／一般社団法人日本ベビーシアターネットワーク理事〕

1981年生。2004年、岡山大学教育学部卒業。2006年、とらまる人形劇研究所附属人形劇学校パペットアーク卒業。2008年、岡山大学大学院教育学研究科修了。くらしき作陽大学子ども教育学部助教・講師を経て、2022年より現職。保育者・教員養成に携わり、学生と共に劇団を組織し、乳幼児向け舞台芸術の地域公演(2008～2023年の実績630回)を行う。日本児童・青少年演劇劇団協同組合ベビーシアタープロジェクトの設立に参画し、日本ベビーシアターネットワーク理事、国際人形劇連盟日本センター理事等を務める。研究業績に「日本における乳児向け舞台芸術の動向」(単著、日本子ども社会学会『子ども社会研究』第29号)がある。

弓井兼那〔BEBERICA theatre company 代表／演出・プロデューサー／一般社団法人日本ベビーシアターネットワーク理事〕

京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)、座・高円寺劇場創造アカデミーにて舞台芸術を学ぶ。俳優としてクロード・レジの作品に出演し、世界三大演劇祭のひとつアヴィニョン演劇祭に参加するなど国内外で活動。ドイツ・デュッセルドルフの児童青少年劇場で演劇教育士として従事。国際児童青少年舞台芸術協会の世界大会のプログラムで次世代の担い手の一人に選ばれる。2016年より、乳幼児とおとなを観劇対象とする演劇作品「ベビーシアター」を制作するベベリカ・シアターカンパニーを設立。2020年にアジア初となるベビーシアター実践家のネットワークングを目的とした「第1回アジアベビーシアターミーティング」を開催。

田中昌司〔上智大学名誉教授／工学博士／日本声楽発声学会理事〕名古屋大学工学部・大学院工学研究科博士課程修了(工学博士)。上智大学理工学部において長年脳科学の研究・教育に携わる。米国イェール大学医学部客員研究員、米国コロンビア大学医学部客員教授として在外研究を行う。これまで脳の社会的認知機能と感情の関わり、精神疾患患者の脳、音楽・演劇における脳活動、とくに内的精神世界の構築、エピソード記憶などの研究を行ってきた。研究手法は脳イメージング・データに基づくネットワーク解析などの最新技術を用いている。現在上智大学名誉教授。近刊：『音大生・音楽家のための脳科学入門講義』(コロナ社)、『音楽する脳と身体』(コロナ社)

横山義志〔ドラマトゥルク／舞台芸術研究〕

ドラマトゥルク、舞台芸術研究(西洋演技論史)。SPAC-静岡県舞台芸術センター文芸部、東京芸術祭リサーチディレクター、学習院大学非常勤講師、舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)理事・政策提言調査室長。

1977年生まれ。生物学を志したのち、演劇を専門に。2008年にパリ第10大学演劇科で博士号を取得。2007年からSPACで海外招聘プログラムを担当し、30カ国以上を視察。近年、生物学と舞台芸術の関係について考えている。

吉見俊哉〔國學院大学教授／東京大学名誉教授〕

社会学者。國學院大学観光まちづくり学部教授、東京大学名誉教授、東京大学出版会理事長。上演論的アプローチから都市論、メディア論を展開、日本のカルチュラル・スタディーズで中心的な役割を果たしてきた。長く東京大学で教え、大学院情報学環長、大学総合研究センター長、教育企画室長、副学長などを歴任。現在、デジタルアーカイブ学会長、東京文化資源会議会長。主な著書に『都市のドラマトゥルギー』『五輪と戦後』『東京裏返し』『アフター・カルチュラル・スタディーズ』『平成時代』『視覚都市の地政学』『夢の原子力』『アメリカの越え方』『大学とは何か』『博覧会の政治学』『ポスト戦後社会』『親米と反米』等、多数。

松延耕資〔作曲家／演奏家(紙カンパニー project)〕

さまざまな音楽に影響を受け、<架空の地方のフォークミュージックを捏造する>ことをテーマに活動。バンド／ソロ活動を通じ自作曲を発表する傍ら、蛭川幸雄演出作品への出演をきっかけに、舞台での演奏、楽曲提供を開始。2020年、親交のあった各分野の専門家らとともに、架空の演劇公演を<あったことにする>技能集団「紙カンパニー project」を立ち上げ、以降その企画・運営、使用楽曲作成に携わる。

内野儀〔学習院女子大学教授〕

1957年京都生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(米文学)。博士(学術)。岡山大学講師、明治大学助教授、東京大学教授を経て、2017年4月より学習院女子大学教授。専門は表象文化論(日米現代演劇)。著書に『メロドラマの逆襲』(1996)、『メロドラマからパフォーマンスへ』(2001)、『Crucible Bodies』(2009)。『「J演劇」の場所』(2016)等。公益財団法人セゾン文化財団評議員、公益財団法人神奈川芸術文化財団理事、福岡アジア文化賞選考委員(芸術・文化賞)、ZUNI Icosahedron Artistic Advisory Committee委員(香港)。「TDR」誌編集協力委員。

萩原雄太〔演出家／かもめマシーン 主宰〕

1983年生まれ。個人の身体と公共との関わりに焦点を当てた作品を創作。2011年、福島第一原子力発電所事故の避難区域から数百メートルの場所で『福島でゴドーを待ちながら』を上演。日本国憲法を扱った『俺が代』は、2017年ルーマニア国際演劇祭Temps d'Images Festivalに招聘される。その他の代表作にシアター・コモンズ'18に招聘された『しあわせな日々』や、コロナ禍において創作した『電話演劇シリーズ』など。TheatreTreffen International Forum (ベルリン)参加。Asian Cultural Council のフェローとしてニューヨークに滞在。

この連続講座事業はコロナ禍を契機にスタートし、2021年度は舞台芸術の法務・労務・財務を主なテーマとした「舞台芸術の「契約」にまつわる連続講座2021～持続可能な創造環境に向けて」を行いました。翌年度は見過ごしてきた舞台芸術界の別の問題に目を向けて、「舞台芸術の「関係性」をめぐる連続講座2022」としてジェンダー、ハラスメント、コミュニケーションなどについて取り組みました。かねてより舞台芸術界にある様々な問題の可視化とその解決に向けた土壌づくりをはかる、緊急性と実務面を考慮したプログラムといえます。報告書がON-PAMのサイトにありますので、ご覧頂けたら幸いです。※QRコードが次ページにあります。

振り返れば今から4年前、2020年3月に新型コロナウイルス対策の特別措置法が成立し、翌月には緊急事態宣言が発令。芸術団体や劇場の数々の公演が中止・延期となり収入が激減し、関係者がギャラを受け取れない事態が起きていました。他に収入を得るために舞台の収録映像の配信をしようとしても、著作権の問題でできなかったケースもあります。関係者や観客の罹患を含め、舞台芸術界がこの時ほど大きなダメージを受けたことはなかったでしょう。

対策として文化庁の継続支援事業などある種の救済的な補助や助成事業が実施され、大きな助けになりました。貴重なサポートであったことは確かです。その一方で舞台芸術活動が公的助成に相当に影響を受け、社会状況に大きく左右されることが今まで以上に実感されました。不要不急という言葉も聞かれ、舞台芸術が社会に従属的に認識される嫌いもありました。

舞台芸術の社会的価値を考え伝えていくことは大切ですが、それだけが重要ではなかったはず。以前から舞台芸術が人間と社会の本質をとらえ変えていく力があることを見直したい、もともと持っているはずの力について共有したいと考えていましたが、その思いを新たにし、今年度の連続講座のラインナップと最終回の「舞台芸術の公共性と公共圏」に結びつけています。このテーマで3年間のシリーズは締めくくられました。

シリーズの通しタイトル「持続可能な創造環境に向けて」は各年度で変わらず、常にその視点を持っていました。これまで創造環境が持続可能ではなかったこと(今もですが)、そのために活動を辞めざるを得なかった人や何とか活動を続けている人のことが、頭を離れずにいます。講座の構成も変えなかったことの一つです。全部で19の講座を通じて、専門家や研究者などアカデミックな立場の方々とアーティストや制作者などの実践者が、それぞれの見地で舞台芸術を内外からとらえ、時に問題提起が行われてきました。現場の声を大事にして伝えたいという考えと、ふと立ち止まって自らの活動を見つめ直すきっかけになればという狙いを持ちながら、講座同士のつながりからも舞台芸術の特質と業界の構造が浮かび上がることを企図していました。誰もが忙しい中にもオンラインでつながり(アーカイブ動画視聴も)、一つのテーマについて共に学び考える得難い機会だったと思います。受講された皆さま、ご登壇頂いた方々、支え続けてくださった公益財団法人セゾン文化財団と公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの方々に心より感謝申し上げます。

これは出発点であり、変化には時間がかかります。

連続講座で培われてきた土壌に一人ひとりの手で種がまかれ、創造環境が持続可能なものへと育まれていくことを願っています。

誰もが安全で安心な状態で舞台芸術に関わり、その創造性を発揮できるように、また享受できるように——共に手を取り合って歩んでいこうではありませんか。

2024年3月

特定非営利活動法人舞台芸術制作者オープンネットワーク

古元道広

舞台芸術の「未来」をのぞむ連続講座2023 ～持続可能な創造環境に向けて

報告書

開催概要

期間 | 2023年10月～2024年3月

会場 | ZOOMウェビナー / ZOOMミーティング

対象 | 舞台芸術をはじめ芸術、文化活動・事業に携わっている方。
本講座で学びたい方、興味のある方はどなたでも。

受講料 | 全講座(6回) | 一般：4,000円 学生またはON-PAM会員：2,500円
各講座(1回) | 一般：800円 学生・ON-PAM会員：500円
※2024年3月29日までのアーカイブ動画視聴を含む

申込方法 | Peatix

文字支援 | 特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

企画・コーディネート・制作 | 古元道広(ON-PAM)

制作 | 加藤七穂(ON-PAM)

アーカイブ動画編集 | 河崎正太郎

フライヤー・報告書デザイン | 永戸栄大

主催 | 特定非営利活動法人舞台芸術制作者オープンネットワーク[ON-PAM]

助成 | 公益財団法人セゾン文化財団

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

2024年3月



公益財団法人セゾン文化財団



ON-PAMとは

舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)は、アーティスト・芸術団体と観客の間を繋ぐ仕事に携わる人たちの全国的・国際的な会員制ネットワークです。舞台芸術を推進する者が主体的に参加し、各々の仕事を通じて日々更新される情報やアイデアを交換、共有し、活動の展開につなげる場を形成します。そして、同時代の舞台芸術の社会的役割の定義・認知普及、文化政策などへの提案・提言を行い、舞台芸術及び社会全体の利益の増進に寄与することを目的としています。

2024年3月現在で、正会員174名、個人賛助会員13名、学生会員9名、団体賛助会員14団体を擁しており、会員を募集中です。興味のある方はウェブサイトの入会案内をご覧ください。

「契約」にまつわる
連続講座2021[報告書]



「関係性」をめぐる
連続講座2022[報告書]



特定非営利活動法人舞台芸術制作者オープンネットワーク[ON-PAM]
東京都渋谷区恵比寿1丁目15番9号 日宝恵比寿ビル403
E-mail: info@onpam.net http://onpam.net/



舞台芸術制作者
オープンネットワーク